

蘭元捕虜の家族と九州の捕虜収容所跡地を旅して

2017年3月29日から3日間、当会の福林徹、古牧昭三、田村佳子はオランダの三世代の家族5人と共に、九州のゆかりの土地を回りました。これは、生還した蘭元捕虜の孫ティエリーさんからP研ホームページへの問い合わせがきっかけでした。

「オランダの公文書館で祖父の銘々票を入手した。日本語の部分が分かりにくいですが、どうも祖父はジャワで捕虜となり、しばらくして日本に行ったようだ。福岡第1分所、次に第17分所の記入がある。近々家族で訪日したい。貴会で更なる情報を頂けないか？」というメールで、福林さんが対応しました。

【銘々票の記載】

1942年3月8日、ジャワにて捕獲される。

姓名： Paul Daniel

生年月日： 1921年9月4日

本籍： ジャワ島 Pasoeroean

階級： 蘭軍歩兵2等兵

1943年7月25日、独立分遣所に収容される。*

1943年12月4日、福岡俘虜収容所第1分所に収容される。

1944年12月5日、福岡俘虜収容所第17分所へ。

1945年9月15日または1945年9月16日、長崎港にてグリフィン大佐に引渡し。

* バンドン近郊のチマヒ。

** バンドンから「マカサル丸」でシンガポール、そこから「はわい丸」で1943年12月3日門司入港の可能性が高い。(オランダ在住の会員、中沢陵子さんの協力)

3月29日(水) 福岡第1分所跡地へ

3月半ば、東京に降り立ったイングリッド(蘭捕虜ポール・ダニエル Paul Daniel の娘)、その夫のフレッド、イングリッドとフレッド夫妻の息子 ティエリー (蘭捕虜の孫)、ティエリーの妻イレーヌ、ティエリーとイレーヌ夫妻の娘エミリア(4歳)の5人は日本各地を旅行し、3月29日いよいよ福岡に到着。福林、古牧、田村が合流し、彼らのホテルからタクシーで、**福岡第1分所跡地**訪問となりました。道路を隔てた向こう側はもう福岡空港、間近に見える滑走路では旅客機がひっきりなしに離発着しています。「1943年12月連合軍捕虜1229名を乗せた「はわい丸」が門司到着、内、蘭捕虜30名を第1分所に移管、捕虜達は主に空港建設工事に従事」との記録があり、ポール・ダニエルさんはその一人だったようです。イングリッド始めオランダの家族は古い地図と地形を見比べ、どのように移動して来たのか等を熱心に質問していました。

福林さんの「この収容所が出来るまでは捕虜は多々良から毎日徒歩で1時間ほどかけて通っていた」との説明に、家族は当時に思いを馳せていました。

この日は予め古牧さんに連絡のあった西日本新聞の記者とRKB放送の取材申し込みもあり、イングリッドは家族で相談の上、それに応じました。31日に記事が掲載されると、「当時、私は中学生。動員で電気関係の仕事を二人の捕虜と一緒にしていた」等の情報が寄せられました。RKBからは翌日も同

行取材の申し込みがありました。

3月30日（木） 門司、水巻、大牟田へ

この日と翌日は古牧さん運転によるレンタカーでの旅、ホテルを9時出発。ポール・ダニエルさんがジャワから1943年12月「はわい丸」で到着した門司港を見学。当時の外国航路の到着ロビーのあった建物の1階には、今は沢山の船の模型の展示とその説明。「はわい丸」の模型はあいにく無く、残念でした。2階に上がると、そこは船の元到着フロアー。大型船と目の高さが一緒になるので、その昔船客が行き来した様子が想像出来ました。捕虜もここから日本の大地を踏んだのでしょうか？ポール・ダニエルさんは福岡に来て初めて雪を見たそうです。今は港の辺りは埋め立てが広がり、目の前の陸地がかつて海だったとは想像するも難しいものがありました。道路脇ところどころに残る岸壁の名残、船のロープを巻きつける繫留柱が唯一当時の賑わいを想わせるものでした。それから私達は、海外に出航する前に最後の水を吞ませた馬の水飲み場の記念碑、また門司港からの海外出兵を記念した碑を見て、その後、修復中の門司駅に移動。捕虜達が列車に乗った当時のままだというプラットホームを、イングリッドは夫のフレッドと感慨深げに歩き、しばらく佇んでいました。

このホームからは港へ直接通じる連絡船通路が当時存在し、壁には目立たなく、現代の監視カメラの役割を果たしていた旧「監視孔」があり、戦争末期に軍命令でこの小さな孔から通行人を覗き、不審者を警戒していたそうです。

水巻では第6分所の死亡者慰霊から始まった慰霊塔「十字架の塔」へ。今は両サイドの銅板に日本全国で亡くなったオランダ人捕虜871名の名前が刻まれています。その中に蘭印系の名前を数多く見つけ、イングリッドや息子のティエリー達は改めて戦争の引き起こす過酷さを思い、この歴史を特に日本の若い人達に学んで欲しいと心から訴えていました。古牧さんが用意した花束をそれぞれに献花し、戦后再訪した蘭捕虜ウインクラーさんと黒河博さんとの友情を偲んでいる時、おりしも草掃除に訪れた黒河さんの弟省二さんご夫婦にお会いし、しばしの歓談を楽しみました。黒河省二さんは生還した蘭捕虜のご家族に初めて会ったと、大変感動され、イングリッドの手を取るなり、「あなたのお父さんはよく頑張った。本当によく頑張られた。」と硬く握りしめ、まるで全身の力を込めてねぎらうように、立ち尽くされました。それを理解したイングリッドは涙を浮かべて「ありがとう」と握り返し、彼女にとってこれは大きな癒しになりました。



水巻の十字架の塔の前で。左から、フレッド、黒河夫妻、イングリッド、ティエリー

次にポール・ダニエルさんが1944年12月5日に移管された大牟田を訪問。

大牟田では福林さんと旧知の「大牟田の空襲を記録する会」代表の中嶋光秋さんが出迎えて下さり、まずは三池炭鉱の一つの三川坑跡に行きました。2015年世界遺産に登録され、訪問したこの日はちょうど閉山して20周年になるとのことで、特別公開の日でした。薄暗く急な階段を降りる入昇坑口か



福岡第 17 分所三池三川坑での捕虜。

米公文書館蔵、福林徹提供



閉山した現在の三池三川坑跡

ら斜坑を見学、戦中は労働不足を補い捕虜や強制連行の労働者を就労させたという当時の様子を思い出しました。イングリッドが突然お父さんに聞いた炭鉱での様子を話し出しました。「辛かったのは虐待。口からホースで水を入れ、一杯になると、上からお腹めがけてジャンプされた。ある時は跪かされ、膝の後ろに竿を入れて正座、頭の上には水を入れたバケツを持たされたこともあった。父に良い思い出は？と尋ねると、日本人鉱夫達は手にドリルを持って実に機敏に働いていた。彼ら数人と自分達捕虜数人のチームを組んでいたが、作業は辛かった。時々、自分達にしばらく座って疲れを取れるようにしてくれた。監視兵が回って来ると、大慌てで、立って仕事をするよう手振りで教えてくれた。また自分達はおにぎりだったが、彼らは家から持参するお弁当、それを分けてくれることもあった。」

その後、私達は捕虜収容所跡地に移動しました。鬱蒼と草や大きな木々が生え、とても当時 1700 以上の捕虜がいたことを想像するのは難しい。中嶋さんが見せて下さるこの福岡第 17 分所の見取り図と現在の土地の区画がほぼ今も変わらないので、それで推し量るばかりでした。



福岡第 17 分所。米公文書館蔵、福林徹提供



現在の第 17 分所跡

あたりはすっかり夕刻となり、石炭産業科学館に行くことが出来ず、大変に残念でした。三池炭鉱の様子を伝える映像を見て、大牟田の米元捕虜、レスター・テニーさんの証言にも耳を傾けてもらいたかったのですが、事前の予告だけに終わってしまいました。

(この 29 日、30 日の訪問の様子は 4 月 7 日 RKB 放送から夕刻のニュースで報道されました。)

3月31日（金） 長崎へ

ポール・ダニエルさんが1945年9月15日辺りに帰国した長崎港を見学へ。福岡8時出発で一路、長崎へと急ぎました。「ピースバトン・ナガサキ」代表の調仁美さんと副代表の松田斉さんが出迎えて下さいました。（小中学校への原爆出前授業というユニークな取り組みをされています。）

帰還捕虜は大牟田から列車で長崎港駅に到着したことから、今は取り外された線路と駅の痕跡調査から始めました。大波止湾に注ぐ中島川の河口に海に並行して掛けられた鉄橋の跡、またそれに至る線路の跡地は、今は道路の歩道として使用されていました。対岸には写真碑があり、煙を吐き鉄橋を渡る蒸気機関車の雄姿が紹介されています。孫のティエリーから、空襲や原爆による被害は鉄道には無かったのか？との問いに、周りの建物への被害などは甚大だったが、線路や駅舎は使用に問題はなかったようだ、との松田さんの説明。その後、線路の先にあった、今は無き駅舎の検証を米公文書館で入手された写真の数々を見せて頂きながら、その位置関係などの説明を受けました。また、大波止埠頭のどの辺りに引き上げ船や病院船が停泊していたか等の説明も受けました。当時とは辺りはすっかり様変わりしていますが、山々の稜線は変わらないので、帰還する捕虜達の立ち位置を写真と見比べ、検証することが出来ました。



鉄道跡にある記念の車輪。ここから中島川を越えて鉄道が延びていた。



帰国する捕虜の写真（松田斉さん提供）と現在の大波止埠頭。

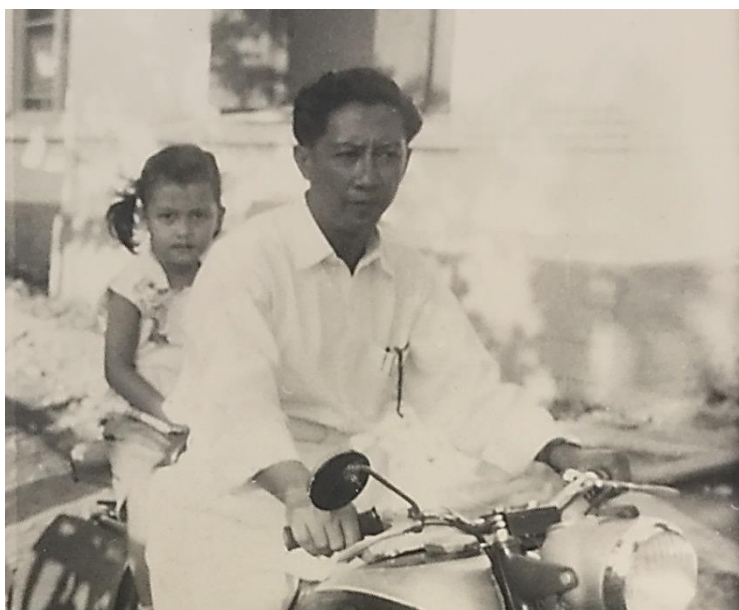
長崎で有名な皿うどんやちゃんぽんでの昼食後、オランダの人達の希望で、出島と長崎原爆資料館を訪ねました。オバマ大統領の折りヅルもケースに入れて大切に展示されていました。

彼らにとっては大急ぎの長崎訪問でした。が、帰りの車中で孫のティエリーから「家族を代表して皆さんに感謝の言葉を送りたい。今回は皆さんのおかげで、期待した以上に、祖父の足跡を沢山たどることが出来ました。私達の日本に対する気持も変わりました。必ずまた日本に戻って来ます。」とのご挨拶がありました。これはひとえに、P研問い合わせメールへの福林さんの対応、そして準備・案内に更に安全運転にと、疲れを人に見せない古牧さんの底力あつてのことと思います。互いに学ぶことの多い実りある旅でした。

<道中で拾った言葉>

イングリッド：

「私が17歳の時に逝ってしまった父だが、生前、彼は決して自分からは捕虜経験を話さなかった。私が日本はどんな国だったの？どんなものを食べていたの？と聞くと、例えば、スープを飲んだ、とだけ答える。そのスープには何が入っていたの？と聞くと、何も入っていない、薄いスープだった、と答えるのみ。ほんの少しずつしか答えず、私が更に問うと、またほんの少し答えてくれる。謎解き問答のようだった。ただこのような調子で積極的に話してはくれなかったもので、他の子ども世代のように、父親のトラウマを私がそっくり引き継ぐことが無かったことに感謝したい。



ポール・ダニエルとイングリッド

1957年ごろ、スラバヤにて

が、毎夜のように、父は悪夢にうなされる

ことが多く、大声で叫んだり、大汗をかいたり、母は大変だったようだ。真夜中のことで、親たちは子供の私が気づかないかと思っていたらしいが、家の中のこと、子供は何となく気づくものだ。そんな夜、あまりの大声に驚いた母が、父を起こすと、「フクオカにいる夢を見ていた。」と答え、子供心にこの地名は特別な意味を持つようになった。だから、今回初めて福岡に来て、駅構内などあらゆるところでFukuokaの文字を目にし、震えを感じた。」

「独身だった父は20歳で捕虜となり、日本に行った。一方、互いに当時はまだ出会っていなかった母は13・4歳で、私の祖母と一緒に抑留所に入れられた。祖母は母に常に醜い顔をするように言い、幼く見える服を着せた。年頃で胸が膨らむようになったが、祖母は布を巻き膨らみが見えないように工夫した。毎晩、日本兵がやって来て16・7歳の女の子をどこかに連れて行った。しばらくしてその子たちは妊娠し、出産することもあった。あまりにも若くて、赤ん坊をどうして良いのか彼女達は分からない。周りの大人たちがその赤ん坊を自分の子供として育て、戦後その子達もオランダと一緒に連れて来たと、聞いている。」

「戦後、母は父と出会い、インドネシアで結婚。父は戦前していた砂糖工場の仕事を続け、独立した。幼い私をよくバイクに乗せて市内を回ってくれた。」

「母の兄も、また父の従兄も捕虜として泰緬鉄道で死亡している。その為か、父は決して日本製品を購入しようとはしなかった。」

「(門司港、馬の水飲み場前で突然思い出し) インドネシアでのことだと思う。父は日本兵の為、馬の世話をさせられていた。」

フレッド (イングリッドの夫)：

「私の家族も同じように戦前は蘭印で暮らしていたが、私の父が学齢期になる頃、家族全員でオランダに移り住んだ。その後すぐ戦争が始まった。だから私の家族には蘭印での戦争の歴史は無い。が、アンネ・フランクと同じ経路を辿ることとなった。私の家系はオランダ系ユダヤ人。ドイツの侵攻で、私の

父以外、家族全員がアウシュビッツで死亡している。父は助けてくれる人がいて地下にもぐり、ドイツと戦い、ただ一人生き延び、戦後結婚し、私が生まれた。」

「このように私も妻のイングリッドの家系も戦争に大きな影響を受けた。毎年5月8日（ヨーロッパの終戦記念日）、そして8月15日（日本の終戦記念日）には必ずアムステルダムに子どもたちを連れて式典に参加して来た。今は孫たちを連れて毎年参加している。私達双方の家族の歴史を忘れない為だ。ティエリーの娘のエミリアも大きくなったので、そろそろ彼女も連れて行こうと考えている。」

ティエリー（イングリッドの息子）：

「私はオランダで不発弾探索の仕事をしている。ドイツ軍による空襲で今も数多くの不発弾はオランダ国内、また海に埋没している。祖父のことを調べ、インターネットを検索している時に偶然POW研究会のサイトを見つけ、連絡を取った。祖父の日本での生活がよくわからなかったが、今回の旅で大きな収穫があった。今後もあなた達と連絡を取り合いながら、祖父のことを調べて行きたい。私の姉の子供達は学齢期で、今回一緒に来たが叶わなかった。次回は是非一緒に来たいと思う。」

「（イングリッドも繰り返し同じ感想を吐露）来日して、これまで持っていた日本に対する印象が完璧に変わった。何と美しい国だろう。泊まるホテルはどこも素敵で清潔、サービスも行き届いている。どの人も大変親切で、町中がとてもきれいだ。（よくこの意見を言われたので、反対にこれまでどんな印象を持っておられたのか、ついに聞きそびれたのが非常に残念です——田村）」

「日本の若い人達には、歴史には二面あることを認識して欲しい。一面のみを見ないで、その裏側の歴史もまた学んで欲しい。」

イレヌ：（ティエリーの妻）

「私はペルー人。ティエリーとはアメリカの大学にいる時に知り合った。私の祖父母は共に日本人。残念ながら私には日本語は一言も話せない。彼の家族とは日本という不思議な縁で繋がっている。これを機会に日本について知りたいと思う。また娘のエミリアにも日本のことを教えたい。」